

梅雨があけました。今年の梅雨はしとしとじめじめの雨という記憶ではなく、降る時は豪雨というはっきりした雨という感じでした。果物や野菜にとって適量の雨だったかどうか心配です。でも、立ち枯れの樹木や果樹や野菜もなく、大地の周辺は躍動感あふれる草花や雑草がたくましく繁っています。

梅雨明けの猛暑の中、子どもたちは朝から頭びっしょりの汗をかいて元気の登園してきて、そして、再び汗びっしょりになって外で遊びます。エアコンのきいた部屋で遊ぶのではなく、自然の暑さと共有し、そして木陰の涼しさや大地の室内の快適さ・さわやかさをしっかり味わっている子どもたちです。快適さを勘違いすると、24時間快適な環境で過ごす意味と勘違いしてしまいますが、真の快適さとは、汗が流れ出る行動・体験から、木陰や冷たい水に遭遇した時、逆に、凍える寒さから暖かい薪ストーブなどにあたった時、この瞬間が、最高の快適さであり、快適さとは、瞬間の出来事かもしれません。今の時代、この真の快適さを、子どもたちに体験させることは、大人が意図的に努力しなければならない時代のような気がします。ここから、シュタイナーの論じる「生命感覚」が育まれることは間違いありません。

「大人の快適さと子どものそれとは反比例する」「大人にとっての便利さ・快適さ・合理性などは、子どもにとっては不幸であり魅力的ではない」と大地では、創立時から一貫して考えています。ドロドロの道や草刈りとの戦いである環境は、大人にとっては、時には辛い事ですが、子どもにとっては、欠かすことのできない魅力です。

さて、夏休み。真の快適さを考えながら、家族で素晴らしい時をお過ごしください。



## 【一人でもやる】

4人の子どもたちが大きくなると、過去を顧みること多くなる。もちろん、これからの夫婦の人生を謳歌するエネルギーも、そして、目標も夢もあり充実した楽しい毎日をエネルギーに送っているが、同時に、人生の歴史を感慨深く、振り返る時もある。

夕方、2人で大地のリンゴ畑に入ってくると、大地が見渡せる。22年前は、リンゴ畑と荒廃した丘だったのに、よくここまで素敵な丘になったなあ。妻の精神的な支えのお蔭で、よく一人でここまで開拓・開墾・建設・建築そして維持してきたなあと感慨深くなる。

基本的に、私は、仲間と一緒にやることは苦手であり、自分の身体を泣かせても一人でやるのが好きだ。大地建設も、自分でできない分は、人様の大切な時間をお願いするのだからお金を払って頼んできたが、基本的には、一人でやり遂げてきた自負がある。「人に甘えない」「自分でなすべきことは、まず自分でやってみる」「泣き言は言わない」「自分で落とし前をつける」「一人でもやり遂げる意地を持つ」こんな人生を満喫してきた。それだけに、誰かがお手伝いしてくれた時は、こんなに楽なのかと感謝しながらも、あてにってしまう自分の甘えを感じることもある。

「一人でやるよりも、仲間と一緒にやったほうが、大きなこともできるし、深い感動や仲間との連帯感、充実感も大きい」という話も聞くが、私は、「一人でやっても、同等の大きなことを人間はできる」と信じており、時間の使い方、プロジェクトマネジメント能力を磨いていけば可能性はあると信じている。

長男は言っている。「友だちや仲間と一緒に山登りをすれば確かに楽しいが、頂上に着いた時の充実感、単独の時とは違う。だから、単独で登るのが好きだ」と。長男は、とてもさわやかで優しい男だけに、人当たりもよく、誰とでも友達になれるし、妻と同じように人の悪口は言わず、全てを前向きに、楽観的に好意的にとる子どもだ。もちろん、友だちとワイワイするのも好きなようだが、やはり、一人で黙々と自分の信じている道を進んでいる。

そう言えば、長男や長女が大地にいた時、今の大地の基礎を共に築いてくれた親たちに、「一人でもやる」という人たちがいた。「大地の友」という保護者の新聞も、たった一人のお母さんが手書きで考えや情報を書いて発行していた。お祭りの手作り品製作も、このお母さんが、改善センター（現アップルパーク）で毎日一人でベルトサンダーをかけていた姿が忘れられない。こんな姿に感動して一人でお話をする人、裁縫する人、人形を作る人、ダンスをする人、ギターや歌を一人で歌う人、草花や野菜を育てる人、自分の人生を謳歌する人達が溢れ、子どもたちは、そんな人たちに触れて幼少期を過ごし、大人への憧れを持ってきたのだろう。

同じく、長女も小さいころから一人で絵を書き、誕生日のプレゼントは、コピー用紙500枚一冊の時代もあった。そして、暇さえあれば、一人でケーキや料理を作り、中1の時、人の意見に耳を傾けず、アドバイスを受けない自己中心的な長女は、名言を残した。「私は他人の人生を生きない」と。その通り、「一人でやる」自分の世界、時代を生きてきている。

次男は、子どもたちの中では1番やんちゃで、こっそりゲームをしたり人並みのいたずらをしてきて、我が家では、親の厳しい眼を盗んで、友だちとつるんでいたずらをしてきた子であり、人に流されてしまうと懸念していたが、中学頃から、大好きなテニスのために朝4時位から一人でも学校へ行き、早すぎると注意される始末であったが、以後、「一人でもやる」人生を送っている。

野球好きの3男は、文字通り幼稚園の時から「一人でもやる」を貫いてきており、高校受験を控えても、新聞配達、早朝練習とやり続けている。野球はチームスポーツであるが、この時は「一人でもやる」スタンドプレーは、ないので安心していい。

元旦ののはな文庫の火災。家族全員が揃っている目の前で、建物が燃えており、消防士が消火活動を行っている光景を前にして、「大丈夫だ、よく見ておけ。お父さんが、これを教訓、意味のあるメッセージととらえ、すぐに再建してやるから。明日には片付けて、あさってからは再建だ」と話す横で、長男や長女は「お父さん、一人でやらなくてもいい、俺たちも一緒にやるから」と声高に叫んでくれた。その通り、翌日、私にとって自分の子どもと同じように思っている長男の高校野球の仲間たちが正月の帰省の大切な時を割いて来てくれた。もちろん「一人でもやる」思いはあったが、涙が溢れる位嬉しかった。その後の再建は、たくさんの人達のご協力のもとで、文庫は再建できたことに感謝は絶えない。しかしながら、来年の新館オープンに向けて、「一人でもやる」エネルギーを楽しんでいきたいと思う。

猛暑の朝、久しぶりに早朝から草刈をした。平坦な場所は、乗用草刈機の時代になり、車の運転のようなものであるが、傾斜地の多い大地の丘は、今も昔も、刈払機しかない。トレッキング用の靴を履き、トレーニングを兼ねて傾斜地を刈る。これだけ広大な斜面の草刈りは時には、気が遠くなるが、その面積は、創立時から変わらないか、むしろ、多くなって来ている。でも、「一人でもやる」という原点・青山家の伝統であり、それを思い返し、磨くことができる「草刈」には感謝すべきことである。

長女の名言「人の人生を生きない」自分で落とし前をつけて、自分の人生を生きよう。

